

# いんば沼

《第37号》



提供：内田 儀久氏（佐倉市鎗木在住）

## \*\*\*\*\* Contents

### 昔日のいんば沼の風情

— 吉植庄亮の随筆集にみる —

- 草木たち …………… 本橋 敬之助
- 魚たち …………… 本橋 敬之助

\*\*\*\*\* Contents

公益財団法人 印 旛 沼 環 境 基 金  
<http://www.i-kouiki.com/imbanuma/>

# 昔日の いんば沼の風情 —草木たち—

本橋 敬之助 (農学博士)  
公益財団法人印旛沼環境基金

いんば沼の水草たちは、「印旛沼開発事業」(昭和21～44年)の竣工とともに急激に消滅した。いま、沼に生育する水草と問われれば、答えとしては、恐らく沼の誕生から脈々と生き永らえてきた抽水植物のヨシ、マコモ、ヒメガマの3種と、昭和50年頃から生育・繁茂しはじめた浮葉植物のオニビシを上げることができる。そして、その他には、と問われるならば、…?

最近までの確かな資料としては(昭和22年～平成13年)、印旛沼の水草研究の第一人者であった故笠井貞夫(元印旛村)が行った調査の結果がある(公益財団法人印旛沼環境基金発行・編集:平成25・26年版いんば沼白書、65～66、2014)。その結果から昭和22年当時をみると、いんば沼には19種の沈水植物を含め46種の水草が確認されており、さながら水草の宝庫の観を呈していたようである。このように恵まれた状況もあって、かつていんば沼周辺の農家は、昭和21、22年頃まで“藻刈り(または、モク刈り)”と称し、沼の水草、主に沈水植物(ホザキノフサモ、マツモ、セキショウモなど)を水田や畑の肥料として採集していた、と古老たちはいう。

さらにその前の時代に遡ってみると、作家田山花袋の小説を収録した「定本花袋全集」第21巻(1995年1月10日発行、臨川書店)の中の長編小説「水あおい」にいんば沼の水草についての描写が2、3ある。ここで、その描写を原文のまま引用する。

なお、本稿および次稿において『二重鉤括弧』で括った文は原著からの引用、さらにその中の(丸括弧)の書体のひらがなは原著に記すルビ、そして斜体文は筆者による注釈と雑筆であることを予め断っておく。

全集の264頁には、『蘆荻(ろてき=あしとおぎ)だの、蘭(い=い草)だの、川楊(かわやなぎ=ねこやなぎ)だのに半ば埋もれて了つたやうに見える。……水あほいの美しい紫の花もあれば、黄い河骨(かうほね)の可愛い花も点々と…』、また380頁には、『……沼すべてが藻と思はれるほど多いので、貞吉は容易に竿を槽にかえることが出来なかった。452頁には、“蘆荻や、蒲(がま)や、真菰や—さういうもの、向ふに、銀色した沼の水面が侘びしく……』、などとの描写がある。

また、映画監督の新藤兼人が書き下ろした評伝「正伝殿山泰司三文役者」(平成3年、同時代ライブラリー、岩波書店)から沼の水草にかかわる描写を引用してみる(同書154頁)。監督は昭和39年に福島県二本松の民話「安達ヶ原物語」を題材とした鬼婆伝説を映画化するにあたり、舞台となる一面の芒ヶ原を探すのに大変苦労していたという。そして彼は、『……ついに千葉県印旛沼の畔にたどりついた。沼の北端である(長門川右岸の埋立地辺りか…?)。芒と葦が混じって一面に波打っていた』という場所を探し当て、そこで映画化のロケ地に踏み切ったことを述懐している。

しかし、これらの文芸作品の中で描写されているかつてのいんば沼の水草等は、決して主役ではない。あくまでもそれぞれの作品を引き立てる背景としての彩りを添えているに過ぎない。

これに対し、表紙の目次の副題に記した吉植庄亮(伊藤左千夫、小泉千樞と並び房総の3大歌人と称される)が遺した隨筆集、特にその中でもこの拙稿で多く引用している「馬の散歩」(昭和14年、羽田書店)、「米の貌」(昭和17年、羽田書店)、「稲に祈る」(昭和19年、愛宕書房)、「百姓記」(昭和21年、大日本雄辯會講談社)のそれぞれの中で描写されているいんば沼の草木は自然の姿を見事なまでに些細に観察されており、昔日の沼の風情を彷彿させる。

ここで、吉植庄亮の略歴を紹介する。明治17年、印旛郡本埜村(現在印西市)下井に生まれる。開成中学、一高、東大と進学し、大正10年に中央新聞文芸部長として入社。大正13年、父親(庄一郎)の総選挙応援(衆議院)のため新聞社を辞め、生まれ故郷に帰る。大正14年、岡山、愛知、静岡などで農機具を使った大規模

の農場を視察研究し、先祖伝来の百余町に及ぶ出津の土地を開墾することを決心。大正15年（昭和元年）1月31日から作業を始め、昭和5年までに42町歩、その後の昭和10年には延べ60町歩の開墾が完成。同年5月、集約的共同経営を目指す吉植農場を創設。昭和11年2月、農業・農村問題を解決するため衆議院に立候補・当選し、昭和20年12月まで議員活動を活発に行う傍ら、歌人としても活動。昭和23年、大政翼賛議員の一人として公職追放されたが、その後は歌人として門人の選歌・批評を精力的に行い、昭和33年7月には最後の第11歌集「霜ふすま」を刊行、同年12月食道癌を患い逝去した。

さて、本題に戻るが、各随筆集に描写されている草木の姿や風情などを紹介する。

## 》》》 葦（よし） ……

庄亮は葦との出会いについて、『私は葦と萱（かや）との中に少年時代を育った。…略…。私の少年時代に見たものは、軒下からすぐうち續く草原の、萱と葦の瑞々しい發育と、旺盛な存在と、枯淡なる終焉とであった（「稲に祈る」-葦-、122頁）』と書き綴り、葦は忘れぬ生涯の友であったようである。このこともあって、その生育する四季折々の姿や風情の描写は随筆集の随所にみられる。

先ず、冬場の葦について、いんば沼も利根川も凍るほど厳しかった昭和2年の開墾中に、『ところで驚いた事には、その凍った土の下には、もうものの芽が営みを初めてみて真珠のやうな、それでめて茜を染めた芽がいくつも掘り出されたのである（「米の貌」-大寒に萌ゆるもの-、65頁）』と、認（したた）めている。この茜の芽は、『ものの芽が、萩は唐紅（からくれない）の、葦は象牙色の、真菰は真珠色の萌えそむる浅春になると、…（「馬の散歩」-走火-、11頁）』という描写から真菰の芽であることが容易に察しられる。またこの他にも、冬の土中では、『…象牙のやうな、ほのぼのとした、真白い葦芽が、冬のさ中でも、いくつもいくつも掘り出される（「米の貌」-新鮮なる開墾-、11頁）』と、私たちが通常の日々では知ることや、目することのできない水草の力強い命を描き出している。

冬が過ぎ、早春を迎える頃になると、『早春の印旛沼の埜原は葦芽と萩の芽とに象徴されてゐる（「米の貌」-土を謳ふ-、74頁）』というように、葦が主役となっている。そして、『5月になると、この葦は若人となって見るから瑞々しく太る。この葦を（勿論若萱も一緒に）私の家では代々、5月に刈り取って、大利根下流の十六島や潮來、出島などに、田の肥料に賣ったのである（「稲に祈る」-葦-、124頁）』。実際、この葦の肥料効果については、『出津の葦を田の中に犁きこんで置くとどきに腐れてしまふでね、これがまた馬鹿に田の肥に利んだよ。…と、十六島や、潮來や、浮島の人達は私に言ひ言ひしたが…（「稲に祈る」-葦-、125頁）』と、いう具合のようであった。実際、出津の葦については、『私が野守となった印旛沼の野原、何百年かの間に、年年の洪水で沼が埋まって出来た、沖積土であるから、地味は極めて肥沃で、そこに生ふる萩、蘆の類は、よその土地には見られない豊満さ、液汁豊かに、蘆などは折れば漿液土に滴る有様で、繊維少なく、まことに見事なる草をなしてゐた（「馬の散歩」-水郷-、231～232頁）』と、書き記している。

さらに、これに関連することであるが、沼の天然の肥沃の土壌は、それ自身、沼周辺の蘆荻のみならず、良質の農作物を育む最高の肥料であったことを明かす話がある。小川源之助さん（水資源開発公団千葉総合事業所企画・編集：印旛沼ものがたり-あの日あのとき-、38～39頁、2002）によると、『沼周辺の農家では（ここでいう沼周辺とは、印旛沼の最北端に位置する長門川を挟むいまの印西市と成田市の干拓前の水田地帯を指す…?）、日光水（利根川の氾濫による印旛沼への逆流水）と呼ぶ泥水が沼に沈殿したのをすき取り、水田に客土しました。この泥は栄養分が豊富で、稲の生育に役立つ自然の肥料でした』と、いう。しかし、この話は、いんば沼沿岸全体における農家についてではなく、あくまでも沼の北岸部の農家での話である。沼の南岸部の農家では、このような恩恵に浴することなく、先述の藻刈りした沈水性の水草を肥料として利用していたという。

とにもかくにも、吉植の随筆集には、このように葦についてのいろいろな姿や風情が描かれている。その一つ一つをこれ以上、引用・紹介するには枚挙に遑がないの

で、原著の一読を願うことにする。

最後に、吉植が、何故、かくも葦について数多く随筆の中で描写しているのかを推考してみると、結論としては、吉植にとって葦は前述したように少年の頃の記憶にとどまらず、人生そのものであったということに尽きる。要するに生活のすべてを開墾に託した吉植の戦いにおいて、葦は最大の敵でもあり、苦勞の種でもあった。そして、その根絶やしは開墾の成否を決める重要な鍵であった。このため、吉植は自ずと目を葦に向けざるを得なかった一方、その折々に出会った葦の姿や風情が歌人の持つ独特の優しい感性の虜となり、散文化に至ったのではないかと思われる。

## 》》》 菱 (ひし) ……

いま、夏のいんば沼の堤に立ち沼を一望すると、葦、真菰、姫蒲の植生帯の向こうに幅広く、帯状に敷き詰められた翠緑の絨毯と見紛うオニビシの群落を目にすることができる。しかし、このオニビシは古くからいんば沼を生育の場として市民権を得ていた訳ではない。昭和56年頃から突如として繁茂し始め(104ha)、昭和61年には、その分布域をいんば沼の水面積(1,155ha)の約41%に相当する474haに拡大した。そして翌62年には漁業や航行に支障をきたしたことから千葉県がオニビシの刈取り事業を着手、平成6年まで続けられ終了したが、その後の平成17年頃から再び増え、平成25年現在では繁茂面積が92haに拡大している。

このような事情を知らない沼周辺の古老たちに、沼のヒシの話をする、必ずや懐かしむように「昔、沼で取ったヒシ(ここでいう“ヒシ”は、現在、いんば沼で大繁茂しているオニビシを指すのではなく、かつて沼に生育し、単にヒシと称する種の“ヒシ”である)をでこ(土地の方言で“たくさん”という意味)食ったもんだ!」と、したり顔になる。

そのヒシについては庄亮も、「米の貌」(一菱取船の事—59頁)の中で、『秋になると、それも舊盆頃(きゅうぼんころ=8月15日の旧盆の頃)が一番賑ふのであるが、子供の私たちは大人達に雑つて、よく印旛沼の菱の實採りに出かけたものである』、『菱は、…略…、おっぼり(大

堀の意にて小さな沼)にも、長門川に澤山あるのではあるが、それは味のぐんと落ちる、胴高菱(どうかびし=いろいろ調べたが不明)、鬼菱の類で、本場物は印旛沼まで出かけねば、採取出来ない事になってゐた』、『菱は菱形の天邊の處に2本の棘(いま、沼に蔓延っているオニビシは4本の棘がついているので、当時のヒシと容易に区別がつく。また、当時4本の棘を持つヒシも生育していたというが、これは姫菱と称し、果実はオニビシに比べ小さいので区別がつく。食用としての利用はなかった)がついている。私達は船の中で、もうその棘のある青い菱を口でうまく剥いて食べる。生の菱は、少し沼臭くあるが、涼しい、みずみずしい味をもっている』、と記している。

なお、いま沼で大繁茂しているオニビシは、当時においても“おっぼり(押堀=かつて利根川の洪水によって決壊した水田地帯の堤防を改修する際、洪水によって深くえぐられた窪地を取り残した場所をいう)”で見られたようであるが、前述の故笠井貞夫氏の昭和22年および昭和38年の水草調査結果をみると、少なくとも沼の中では確認されていない。

## 》》》 柳の絮 ……

私ごとになるが、今から16年前の5月の中旬に4日間、女房と中国を旅行したことがある。当時、北京空港内は改修工事で埃っぽく、薄暗かったが、空港外に出て、宿泊予定のホテルに向かう途中、街路地等で夥しい白い綿が飛んでいるのを目にして驚愕した。気温は暖かく、冬でもないのに、何故、北京では雪が舞い上がっているのか…?どうしても考えられなかった。そして間もなく、バスの中で、その白い綿のごとく雪状の物体が綿毛を持った柳の種であることがガイドの説明で知ったのである。

日本に帰り、その後も長く、そのような事態を見聞きする機会もなく過ごしていたが、ある日、思いがけなく、友人からお借りした吉植の随筆集の中で“柳絮(りゅうじょ)”という言葉に出会った。『5月から6月になると、柳の絮(わた)が波の上に飛んで山女(やまめ=清冽な川に棲む魚の一種)を躍りあがらせたり、出津野いちめ

んの草刈どきの賑ひが、お祭りどきのやうな興奮を與へてくれる（「稲に祈る」-馬鹿筈-、126頁）』との描写があった。また、随筆集「馬の散歩」では、数カ所（80頁、332頁、336頁）に柳絮（りゅうじょ）について触れている。その中から（-雲雀・柳絮など-、80頁）、特に歌人として庄亮ならではの繊細さで細視し、描写した柳絮の姿（動き）をみることにする。

『4月も末になり、5月も始め頃になると、…。柳の絮も、この頃から離れ始めるので、老木の柳一樹に吹き當る青風が空にあがると、そこら一面が、忽ち柳絮光となり、限りなき空の蒼さととけいる微塵光となる。…略…。籠居してゐる時など、あけはなした部屋を通つてゆく柳の絮が、同じ高さにとこまでもどこまでも、幽（かすかに）に、閑（しづか）に、ものの魂の如く、時に或は、納戸の幽暗（いうあん）に流れいり遊びみるのに遇ふ。ある柳の絮はまた來つて、開いた書物のページにまろび、眉にかかり、袖にとまり、またどこともなく舞ひ立つてゆく。…略…。微風が來れば畳の上の柳絮は、玉轉がしの遊戯を始めて、座敷中遊び廻り、そして、三つか五つの大きな軽い玉にまとまる。庭の面は、また、春雪の饑へる如き、ひひたる柳絮である…』と。引用が少々長くなってしまったが、かつての印旛沼の最北端の晩春～初夏における一つの風物としての一面を何う事ができる。なんと素晴らしい歌人の感性か…！

.....

随筆「馬の散歩」は吉植庄亮が上梓した6冊の随筆集のうち、初刊で、内容的には、主として開墾中に体験したことや、見聞きした自然の風情などを紡いだものを収録している。このため、自ずと歌人の特異的ともいえる繊細な感性で捉えられた開墾地における自然の営みや姿が多く描写されている。そしてその描写が人々の心に自然の美しさを、えも言われぬ心地好さとなって、望郷の彼方に誘っている。紙面の関係もあるので以下では、「馬の散歩」の中から、自然を描写した箇所（目次）の頁を追って原文のまま引用し、筆を措くことにする。

》走火のころが過ぎると、…略…、土籠りに萌えてゐた荻の芽、葦の芽、一せいにぐんぐん伸び立ち、真菰が水隅（みずくま）を緑に匂はせ始める（-夜ほし- 12頁）。

》我が家の草原の草は、本當に柔らかである。…略…、五月のあの草原を見たら、荻も葦も菅（すげ）も莎草（くぐ=「広辞苑」にハマスゲの別称とあるが不明？）も、日にとろりと光りとけさうな姿態、たしかに食欲をそそられる（-仔馬- 31頁）。

》表土が二寸も凍つて、開墾鉄も圓匙（えんぴ）もうけつげなかつた冬が過ぎると、土は、…略…、それも4月の頃になると、眞紅の荻が萌ゆる、象牙のよりもなほほのかに、紅さえもふくんだ葦牙（あしかび）が萌ゆる（-春の爆笑- 38頁）。

》くごの草原には、紅い莖苞（ねづと）のズボンをつけた草薺（くさゐ=オオバコのように人の踏みあとによく生える多年草のことか？）ばかりのところもあって、…（-あらくさの花- 83頁）。

》霽（もや）の深い朝だ。……さながら白い夢の國である。その夢の國に眞菰の花が點點と咲いてゐる。その白い夢の花は、私の水馴棹が少しでも觸ると、ほのかにも、うす紅き霞を吐いて、おのれまたうす紅き花にかへる（-眞菰の花- 84頁）。

》やっぱり、出津の埜は五月がいいなあ、見る限りのさみどりである。なんの花もない—花があつても、柳の花、菖蒲（しょうぶ）の花、菅（すげ）の花、くぐの花、みなさみどりの花である（-季節の窓- 331頁）。

最後に、「馬の散歩」には、『四月も末になり、五月も初め頃になると、野原の姿はすっかり變つてしまふ。…略…、今では野原に草刈に來た出津人が、黒髪くろかみの如く柔かになびくくぐを褥むしろに、白日晴天にみどりのまぐわひまぐわひをしている、神世そのままの童男童女を、……（-雲雀・柳絮など- 80頁）』と、自然の中で営む男と女を美しく描写（？）…、もある。

## 表紙の写真

佐倉市鎗木在住の写真家内田儀久さんが昭和55年の早春、印西市古高にある農業揚排水機場から成田市大竹地先に向けて撮ったものであるが、手前に写る柳の木は上述した庄亮の随筆に描写されている柳絮の話と重なり、印旛沼の昔日の面影が沸々と偲ばれる…。

# 昔日の いんば沼の風情 —魚たち—

本橋 敬之助 (農学博士)  
公益財団法人印旛沼環境基金

前稿では、昔日のいんば沼の草木たちを描写した数々の風情を紹介した。しかし、この稿で触れようとする魚たちの風情について認めた随筆は、庄亮が上梓した6冊の随筆集を見通しても数カ所に過ぎない。鳥たちについては、紅水鶏、鳩 (にお)、鶴 (ばん)、鶉 (ひわ)、雲雀、雁、時鳥 (ほととぎす) などを描写した随筆がそれなりに揃っている。これは、庄亮が吉植家の祖先が遺した原野を開墾することを天職と祖父に諭され、農業人になった庄亮の生活と大いに関係するといえる。要するに、庄亮にとっては、先述したように草木は開墾における苦難の敵であったが、鳥たちは歌人として避け難い格好の季語であるため、自然とそれらに目が向き随筆を紡ぐに及んだといえる。

これに対して、いんば沼の魚たちは庄亮の生活とは、直接、係わることもなく、ただ単に食するか、あるいは遊びの対象に過ぎなかったため随筆として遺すにいたらなかったのかも知れない。と、記したものの、ここで、ちょっと興味深い話に触れるが、庄亮が天寿を全うできたのはいんば沼に鯰がいてこそである。これについて、庄亮の歌弟子であった鈴木康文の著の中に〔「吉植庄亮—その歌と農業と政治について—」(柏葉書院刊、p.15、1972)〕、『庄亮は二、三才頃より、医師も恢復容易ならずといわれるひ弱だったが、慈愛深い祖母が、昼夜背負い、子鯰の頬肉のみで養い、骨と皮のみになった一命を取りとめたのである』と、書き記されている。

さて、このことは扱措き、最初に庄亮が当時のいんば沼の魚たちの風情を描写した数少ない随筆を取り上げることにする。

『走火の頃 (浅春の頃) が過ぎると、……暖い土砂降り雨をよく降らせたがるものであるが、この一日或いは一夜の雨の揚句は、印旛大沼 (当時、今の北印旛沼を指していた) の水量が俄に増して、埜原 (のはら) の低處 (ひくど) は一めんの水となり、荻も葦も、みんなその水底の光となってしまふ。かうなると、魚族にとって沼の中よりも、この新鮮な芽の群落の光る、浅水の方がどれだけ愉悦をもたらすか知れぬとみえて、鯉、鮒、鯰等の魚群が、彼ら自身も光となって、屯し遊ぶのである (『馬の散歩』—夜とぼし—、13頁)』、またこれに続き、同頁で『…略…、青蘆 (あおあし) も二尺餘りに伸びた頃である。…五貫津埜地 (ごぐわんつやち) の低地に行ってみると、その小水路は鮒の行進で埋まってゐる。鮒、鮒、鮒、ただ鮒ばかりだ。鮒の上に鮒、その上に水が盛り上がり、水が騒いでいる。…、これは昨夜の雨で水漬いた野邊 (のべ) に、散歩と産卵とにやって来た鮒の一大群であった』との、描写がある。

なににせよ、これらの様子から、当時のいんば沼における魚たちの賑わいには想像だにし得ないところであるが、これは、当時、いんば沼に注ぐ水の道 (流水路) のすべてが魚たちのみならず、沼の生きとし生ける物の生活回廊、今はやりの言葉で言えば、まさにバリアフリーで行き交いが自由であったことに因由する恵みの証 (あかし) である。だから、魚たちは沼に繋がる水域の何処へでも自由に散歩もでき、産卵にも出掛けれ、そして結果として生きもの多様性を育み得たのである。これに比べ、現在の矢板護岸や木柵、水路のコンクリートなどと化したいんば沼は言わずもがなのことである。

魚たちの話に戻る。鰻といえば、昔日も今日もなく、高価で常食できる代物ではないが、庄亮は全随筆集を通し、ただ一カ所、いんば沼における鰻、特にその食感談義を書き記している (『馬の散歩』—鰻の話—、116～120頁)。それを味読すると、いんば沼の鰻は大正11年、庄亮の父親庄一郎の尽力による印旛水門の完成を期にして味が大きく変わったようである。『印旛沼の鰻も近頃では本場物に昇格して、利根川、江戸川、手賀沼に負けない味になった。それも印旛沼と利根川との接合点にある、印旛沼開門 (かふもん) が出来上がってからこの方の話で、…略…、それまでの利根川からはひって来る洪

水時の濁水といふものは、とろりとろりとした黒濁の水で、洪水がひいた後はいごみ（この意味を調べたが不明）の泥が、…略…、年によると、この洪水が半年は湛えてゐる事も稀でなく、このきびしい、荒い濁に棲んでゐた魚は、鯉でも、鮒でも、泥臭く、骨は硬く、肉の味も私達を堪能させる事もなかった。鰻とても勿論で、くだりの青とくと（秋口から初冬かけて産卵のため沼から利根川を経て海に向かう鰻をくだりと称したが、中でも青味かかった鰻は焼いても肉が縮まず、皮も舌でとろける特上物であった）、流石良い味を持ってゐたが、地物は溝泥臭くって佃煮にする位が關の山であった』と、書き綴っている。

以上が、庄亮の認めた数少ないいんば沼の魚たちの風情である。しかし、実際は、当時の沼には多くの魚介類が所狭しと棲息していたことや、またそれら魚たちが沼周辺の人々の生活の大切な糧であったことを知らしめる伝えや記録がある。本稿の残りの紙面はそれらを逐次紹介し、昔日のいんば沼の魚たちと人々の生活との関わりを知る上での一助となれば幸いである。

最初は、佐倉市臼井田在住の石井幸一さんの話である。彼はいんば沼で漁業を生業として生きてきた人であるが、かつて座談会等（たとえば、千葉県主催：第5回印旛沼再生行動大会・第2部「印旛沼のむ・か・しを語る！」平成20年2月）でお話された魚たちについて紹介する。

- ・鯉は、沼では貴重な魚であって、漁師が捕りたい時においそれと捕れるものではなかった。
- ・一番収入のあった魚は、11月～3月の冬場に「ウナギがま」で捕った鰻であった。
- ・昭和15～18年頃は、延べ縄で鯰を専門に捕った。
- ・昭和20年頃からの“すだて漁”は、その7割が雷魚で、とにかく捕れすぎて処分に困った。
- ・雑魚は千葉県の船橋や東京の築地、大森の佃煮屋に買い取られていった。
- ・鮒は終戦後、釣り堀屋さんはいくらでも引き取ってくれた。
- ・昭和19～30年の間、印旛沼での漁業は最盛期であった。特に、終戦直後は豊漁で印旛沼周辺の人々は生活が助けられた。当時、漁業組合員は800～1,000人もいた。

次に、文章で綴られている昔日のいんば沼の魚たちの風情については、小冊子「印旛沼ものがたり－あの日あるとき－」（水資源開発公団千葉用水総合管理所企画・編集：、38～67、2001）の中でいろいろな人たちの話が編まれているので、それらを紹介し、筆を措くことにする。

・蕨 毅雄さん（佐倉市先崎）

冬になるとフナ、コイ、ナマズなどが多く捕れ、春や秋にはウナギ捕りが盛んでした。

・富井 勝子さん（印旛村吉高）

冬は夕方になると、昼の仕事を早く切り上げて、エビ曳きに行きます。ゆでたり干したりすると、真っ赤になるサクラエビ（ヌカエビのこと）で、天日で一日半ぐらい干しておくと、何日おきかに仲買人がやってきて、買い集めていきました。

・石井 政さん（印旛村吉高）

当時、印旛沼で最も良く捕れたのは無尽蔵と思えるほどのヌカエビでした。漁法は、11月から3月頃まで、夜の10時～翌日の午前3時頃の間、そして三日間漁をやると、当時のサラリーマンの一ヶ月分の収入に相当する金額をふとこにできた。

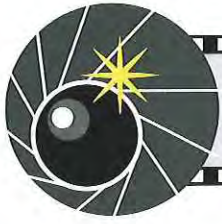
・宍倉 保さん（成田市台方）

洪水で田んぼが冠水すると、稲の間にボラやナマズがひそんでいて、子供でも手づかみで捕れました。

・宍倉日出夫さん（成田市台方）

印旛沼の江川の河口では、タモ網やズ（竹で編んだ筒状の漁具）でウナギ、コイ、フナ、ドジョウ、タナゴ、クチボソ、ナマズ、ライギョ、モクズガニ、ザリガニなど、実にたくさんの魚を捕りました。ザリガニが江川の岸辺が真っ赤に染まるほどいた。……等々である。

ともかくにも、昔日のいんば沼の魚たちの話は紙面が足りないほどに尽きない。前稿での開墾を天職とした庄亮には、いんば沼の魚たちは、さほど縁深いものではなかったかも知れないが、他の沼周辺の農家や人々にとっては切り離せない、まさに生活そのものであったと言える。しかし、いま、この命の魚たちがカミツキガメとか、アメリカナマズとか、オオクチバスとかの外来の魚種に脅かされている。古人が知ったならば…、何と眩くやら…？



## いんば沼を撮る — とり 二題 —



子育てが大変でエサを取る暇もねえ〜だよ。おい、漁師！  
いま捕ってきた小魚を少々お裾分けしてくれや！



俺は、いんば沼の魚たちの溜り場を空から眺め良〜く  
知っているカーンだ！ いま、俺がその場所をお前だけ  
に教えてやるから、誰にも言うなよ…。(文責：K.moto)

この二枚の写真は、印西市山田在住の鈴木康雄氏（いには  
写友会主宰）が撮ったコブ白鳥の親子とモモイロペリカ  
ンである。

コブ白鳥は15年前、沼に数年住み続けていたが、その  
後は消息が不明になっているという。

モモイロペリカンは何処から飛来してきたか分からない  
が、少なくとも20年近く前から沼に棲み続け、今なお、  
漁師たちに“カーン”と呼ばれ大事に見守られている。時  
は、印西市の吉高機場の舟だまりに係留されている漁船と  
いう。脅かさないように、覗いてみては……。

## 編集雑記

子供の頃というよりは中学生の頃まで、事がある  
たびに親父やお袋に、「モッタイネィ〜ことをすん  
な!」、「いまにみている、罰が当たり地獄に落ちる  
からなあ〜」と、よく言われたものだ。要するに、  
このフレーズは、物資的に恵まれていなかった当時  
の人々に身の回りのどんな物でも節約して、大切に  
使えという、箴の一つとして戒める常套句であった。

最近、暇に任せて文豪幸田露伴の次女、幸田文  
の書いた「季節のかたみ」（講談社文庫、平成8年  
6月発行）を読んだ。その中に、上述の「モッタイ  
ネィ〜」に通じる“みずばち”（上著書、22頁およ  
び288頁）という言葉を取り上げて綴ったエッセー  
が2編あった。

先ず、この言葉の重みは、水道が未整備で多くの  
人々が生活用水を井戸から釣瓶か、手押ポンプで汲  
み上げて使っていた頃のことである。

ここで、引用が少し長めになるが、『水づかいは、  
小さい頃からのしつけです。時代のしつけというか、  
地域のしつけのようでもあり、家庭のしつけであっ  
たわけで、どこの子も水を粗末にすると、水罰があ  
たる、とって叱られました。……誰も水の有  
り難さと、手に負えぬ始末のわるさをよくよく知っ  
ているし、水は人が製造する物ではなくて、天物な  
のだということ、常にわきまえていたのじゃないか  
と思います。ですから、粗末にするのを戒める意味  
から水罰というような言葉もあったのでしょうか。』  
と、筆述している。

この文の初述作は今から60年を超える前である  
が、このことは、いまを生きる人々に繰り返し言い  
聞かせたい話である。いまは水道の蛇口を捻るだけ  
で思うままに水を使え、しかも使いたい放題である。

しかし、冗談ではない…。各家庭の蛇口から出る  
水は、昔ならば生活用水に不適だったのが、今では  
最先端の浄水技術によって利用可能な水になったに  
過ぎない。水資源は、昔も今も汲汲とし、むしろ未  
来に向かって枯渇しつつづけているのが実態ではな  
いか…？

私たちの用いる生活用水は、地下に、上空にと  
形を変え、一時お預かりをして、その一部を私たち  
が必要に迫られて使わせて貰っている天物なのであ  
る。このことを知るならば、水の無駄遣いは、まさ  
に「モッタイネィ〜」ことであり、罰があたり、地  
獄へまっしぐらは…、避けることができまい。

(K.moto 記)

編集：公益財団法人 印 旆 沼 環 境 基 金

発行：平成28年5月31日

〒285-8533 千葉県佐倉市宮小路町12番地

TEL：043-485-0397 FAX：043-486-5116